

## 資料紹介

### 柏井園筆「新島先生追悼文」について

今 高 義 也

#### はじめに

柏井園（一八七〇—一九二〇）が新島襄（一八四三—一八九〇）の没後二周年に寄せた「新島先生追悼文」（一九二二年一月、墨書七枚、以下「追悼文」）は、現在同志社大学の新島遺品庫（以下「遺品庫」）に保管されており、その原本の画像が同大学のデータベース上で公開されているが、この文章は『柏井全集』（全六巻、一九二二—一九二七年、警醒社）・『柏井全集』続編（全五巻・別巻一、一九三四—一九三五年、長崎書店）いづれにも収録されず今日に至っており、一般にはほとんど知られていない。本稿は同志社大学の許可を得てこれを翻刻し、その注釈と解題を試みるものである。

一 「新寫先生追悼文」——翻刻と注釈

《翻刻》

\* 【】の数字は注釈番号、「」は翻刻者による挿入を示す。

〔表紙〕新寫先生【①】追悼文

新寫先生追悼之文

新寫先生世ヲ去リテコ、ニ二周年【②】、同志相会シテコ、ニ追悼ノ会ヲ開クニ当リ、豈默然懷旧ノ涙ナキヲ得ンヤ、回顧スレハ予カ始メテ先生ヲ見タルハ明治二十年十一月廿日ナリ、恰モ先生ノ恩人ハーデー氏歿スルノ後数月、此日先生礼拝堂ニ立チテ紀念ノ演説ヲナス、言切ニメ情逼リ、先生演壇ニ立テ泣ケリ、其音容恍然猶目ニアリ【③】、然ルニ今ヤ紀念シタル人ハ却テ紀念セラル、ノ人トナリ、人ノ為ニ泣キタルノ人ハ却テ人ノ為ニ泣カル、ノ人トナル、悲夫、然レトモ予猶記憶ス、先生其時語テ曰、「ハーデー氏ノ去ル天意ノ存スル所カ、サレハ予復何ヲカ云ハン、君ハ此世ヲ去リテ天堂ニ進ミタレハ、吾人最早婦女子ノ態ヲ学フヘカラス、今ヨリ奮テ君ノ志ヲ継ギ、之ヲシテ空シク地ニ墮チサラシメハ、君亦満足セラル、ナラム」【④】、ト思フニ先生カ當時自ラ望ミシ処ノモノハ、今日吾人ニ向テ望マル、処ナルヘシ、サレハ予ハ敢テコ、ニ追悼ノ辞ヲ繰リ返サ、ル可シ唯先生畢生ノ志ニ至リテハコ、ニ一言セサルヲ得サルモノアルナリ

新寫先生鐸ヲ同志社ニ垂ル十五年【⑤】、隱然トメ天下ノ教育界道德界ニ重キヲナシ海内ノ士其人ヲ知ルト知ラサルトニ論ナク生テハ之ヲ尊重シ死シテハ愛惜シテ已マサルモノハコレ至徳ノ人ヲ感スルモノアルニアラスヤ 熟々先生ノ

為人ヲ察スルニ先生ハ學力世ヲ壓スルニアラス才能人ニ絶スニアラス唯至誠ノ徳自ラ人ヲ服スルニ足ルモノアリ且先生ノ徳タル世ノ所謂道徳家ノ如ク冷然タルモノニアラス、生キテ且力アリ先生ノ容ハ溫然トメ親ムヘシト雖モ其中ニ凜然トメ嚴霜烈日ノ如キモノアリ其音ハ惇々トメ愛ニ充テリト雖モ中ニ炎々タルノ光焰ヲ含メリ之ヲ要スルニ先生ノ徳ハ氣ニ動キ体ニ満チ容ニ溢レ自ラ動キ又人ヲ動かセリコレ其幾多有為ノ青年ヲ鼓舞メ發憤セシメタル所以ナルカ而メ先生ノコノ一種ノ徳ハ果メ何ノ処ヨリ得來ルカヲ考フルニコレ固ヨリ区々タル工夫修練ノミノ能クスル処ニアラス之ヲ動かスノ一大勢力ナカルヘカラス何ヲカ其勢力トナス曰先生ノ志ナリ何ヲカ先生ノ志トナス曰日本ノ青年ヲ薰陶シテ至誠ナル青年トナシ日本ノ社會ヲ開拓シテ正義ノ社會トナシ精神ノ教育ト基督教ノ真理トニヨリ日本國ヲ根底ヨリ改造スルコレ先生ノ志ナリ先生一タヒ志ヲコ、ニ立ツルヨリ其志ハ炎々タル烈火ノ如ク燃ヘテ已マス 癸メ米國碧山州ノ集會ニ濺ク涙トナリ【⑥】至誠熱血ノ祈禱トナリ同志社ノ設立トナリ數年間ノ東奔西走トナリ遂ニ此志ヲ抱テ大磯ノ客舎ニ歿セリ先生嘗テ予等ニ語テ曰ク諸君ハコノ日本國ヲ以テ日本四千万人ノモノト思ハスメ我モノト思フヘシ諸君ハ一個人ノ重キヲ知ラサルヘカラス一人奮ヘハ能ク全天下ヲ奮ハスニ足ル【⑦】ト先生は匹夫ニメ國家ヲ以テ自ラ任ジタリ而メ國家百年ノ大計ハ唯青年ヲ教育シテ將來ノ日本ヲ作為スルニアルヲ信ジコノ青年ノ為ニ幾滴ノ涙ヲ灑キタリシカ幾多ノ辛苦ヲ甘シタルカ先生洋行中ノ詩ニ曰 巴里芳花倫敦月夢尋相國寺前人【⑧】ト 嗚呼先生ハ巴里ノ花倫敦ノ月ニ對メ猶日本國ノ青年ヲ忘レサリシナリコノ志ヤ実ニ先生ノ徳ノ養ハル、所先生信仰ノ鼓舞セラル、所先生勇氣ノ生スル所ニメ先生ノ偉人タルハ即チコノ志ニヨリテ偉人タルナリ先生ノ死ニ處スルヲ見ルニ何ソソレ壯ナルヤ然レトモ先生ノ死ヲ知ラントスレハ須ク其生ヲ知ラサルヘカラス 予三國史【ヲ】讀ンテ深ク諸葛孔明ノ高義ニ感ス而メ其誦ミ至リテ潸然暗涙ヲ催ス所ハ孔明秋風五丈原ニ斃ル、ノ時ニアラス

シテ三分ヲ畫シテ南陽ノ草蘆ヲ出ルトキニアリ【⑨】何トナレハコレ孔明劉〔備〕玄德ノ為ニ身を獻ズルノトキナレハナリ五丈原上蜀ノ為ニ死スル者ハ既に草蘆ヲ出ルトキ一度已ヲ殺シタルニヨルナリ新島先生カ大磯ニ死シタル所以ハ十五年ノ昔已ニ己レヲ殺シタルハナリ一身ヲ正義ノ為ニ犠牲ニシタルハナリ先生米國ヲ辞メ日本ニ歸ルヤ手ニ唾メ功名富貴ヲ取ル此時ニアリ然ルニ「故郷ニ飾る錦は匣の内身尔纏ふへき時尔あらねば」【⑩】ト詠し功名ノ心ヲ収メテ僅ニ四五人ノ書生ヲ集メテ獨リ相国寺前ニ学ヲ講ス人已ヲ殺サスハ何ヲ以テコ、ニ至ランヤ此時先生ノ身ハコレ先生ノ身ニアラスメ日本國ノ為ニ獻シタルナリ上帝ノ為ニ獻ジタルナリキリスト十字架ニアリ人罵テ曰人ヲ救ヒテ己ガ身ヲ救ヒ能ハス【⑪】ト先生亦人ヲ救ハントメ己ガ身ヲ救フニ違アラサリシナリ人畢生ノ大目的ヲ抱キ之ニ向テ進ムヤ生モ惜ムニ足ラス死モ哀ムニ足ラス丈夫之ニ至ラハ亦壮ナリト云フ可シ先生カ死ニ臨ミ地図ヲ開テ伝道ノ方策ヲ畫シ教育ノ前途ヲ講ス【⑫】此時先生ノ目ニ日本國アルヲ知リテ復新寫襄アルヲ知ラス嗚呼コレ先生ノ志ナリ

先生世ヲ去リテコ、ニ二年世ハ滔々トシテ名利ノ世トナラントシ不義ノ世トナラントス先生ヲメ生キテ今日ニ在ラシメハ何ト云ハンヤ先生嘗テ詩ヲ作テ曰徒假公事逞私慾慷慨誰先天下憂廟議未定國步退英雄不起奈神州【⑬】ト予輩嘗テ先生ノ教ヲ受ケ若シクハ先生ノ風ヲ慕フモノニメ此有為ノ時ニ当リ有為ノ志ヲ立ツル能ハスハ何ヲ以テ先生ヲ紀念スト云ハンヤ今二周年忌ニ当リ謹テ先生ヲ追悼シ併セテ聊所懷ヲ陳スルト云

明治二十五年一月二十三日夜

二周年紀念會ニ於テ朗読ス

〔裏表紙〕新島先生追悼文

《注釈》

①「寫」は戸籍記載の字体（吉海直人「新島」の名まえをめぐる）、同志社女子大学ホームページ「コラム」〈二〇一三年九月一九日付〉。柏井は基本的にこの字体を用いているが、本文中一部「新島」とあるのは原文のままである。なお、「新島先生」の英文表記としてはデヴィスの新島伝の Rev. Joseph Hardy Nesima がある（注釈⑫）が、本稿の英文タイトルは柏井の文章なので日本名をとり、訓令式ローマ字により Rev. Mr. Jō Nesima とした。

②この追悼文は、一八九二年一月二三日の「夜」に行われた「記念夜会」で朗読されたものとみられる。『同志社文学雑誌』第五一号（一八九二年二月二〇日）の「記事」欄には次のように報じられている。

同記念夜会は専ら生徒のみの会合なりき、午後六時開会阪田氏の司会にして来会者亦甚だ多かりき。初め草部氏の慷慨なる演説あり、桧垣、石塚、寶山、二宮諸氏の文章及び三上氏の英文朗読、檜橋、徳王、小川、橋本諸氏の詩歌朗吟及び吉川、古賀、二氏の演説等あり、散会せし時既に八時を過ぎたり

ここに柏井の朗読は報告されていないが、追悼文末尾に「朗読ス」と明記されていることからみても、実際に朗読されたものとみてよい。

③一八八七年八月七日に死去した恩人ハーディー (Alpheus Hardy) を悼み、新島は同年十一月二〇日 (日) に同

志社の礼拝堂で追悼説教を行った。柏井は当時、九月に入学したばかりの新入生であった。

④ 柏井が「猶記臆ス」として〈引用〉しているハーディー追悼説教の一節「ハーディー氏ノ去ル天意ノ存スル所カ、サレハ予復何ヲカ云ハン、君ハ此世ヲ去リテ天堂ニ進ミタレハ、吾人最早婦女子ノ態ヲ学フヘカラス、今ヨリ奮テ君ノ志ヲ継ギ、之ヲシテ空シク地ニ墮チサラシメハ、君亦満足セラル、ナラム」は、遺品庫が保管する新島自筆の同追悼説教草稿（『新島研究』第四号（一九五五年五月）所収）では「嗚呼君ノ去ル天意ノ存スル所ナルカ、去ラバ予ハ又何ヲカ云ハン吾人須ク、婦女子ノ泣ヲ学ブベカラス、寧（ロ）君ノ志ヲシテ、地に落ちザラシメバ君モ亦天国ニ於テ満足ナラン、喜バルムコトナルベシ」（傍点引用者、以下同じ）となっており、同じく遺品庫蔵でこの追悼説教の筆記とみられるものの複写原稿（『国民新聞』第九二二号（一九九三年一月二二日）付録に「恩人ハーディー君紀念の爲め」として掲載、『新島襄全集』2（一九八三年七月、同朋社出版、以下『全集』と略記）には「〔ハーディー氏ノ生涯ト人物〕」として収録）では「嗚呼君ノ去ル天意ノ存スル所ナルカ 去ラバ予ハ何ヲカ云ハン 君ハ此ノ世界ヲ出テ天堂ニ進ミ賜ヒシコトナレバ吾輩最早婦女子ノ泣ヲ学ブベカラス 今ヨリ振テ君ノ志ヲ接ギ之ヲシテ空シク地ニ落ちザラシメバ君モ亦満足セラルルコトト存ジマス」となっている。傍点部の異同から明らかのように、柏井の〈引用〉は後者とほぼ一致している。

⑤ 新島がアメリカから帰国した一八七五年から没した一八九〇年までの「十五年」を指す。

⑥ 「全国二十大新聞雑誌上に一斉発表せられた」という「同志社大学設立の旨意」（一八八八年一月一〇日）には「明治七年の秋、襄の将に米国を辞し去らんとするや、偶々碧山州、ロトランド府に於て亜米利加伝道会社の大會議あり、（中略）誰か襄が心情を洞察し、其素志を翼賛する者ある乎哉と、且つ演じ且問ひ慷慨悲憤の余不覺

数行の感涙を壇上に注ぎ（以下略）」とある（同志社校友会編『同志社五十年史』へ一九三〇年七月、カニヤ書店）  
八八―八九頁）。

⑦ 柏井が伝えるこの新島の訓戒（「諸君ハコノ日本国ヲ以テ日本四千万人ノモノト思ハスメ我モノト思フヘシ 諸君ハ一個人ノ重キヲ知ラサルヘカラス 一人奮ヘハ能ク全天下ヲ奮ハスニ足ル」）の典故は未詳であるが、「天下経営」の大意を抱けとの同志社生への訓戒は数多く、森中章光編『新島先生片鱗』（一九四〇年、洗心会）によれば、新島は卒業生に「諸君は須らく自ら進んで、天下を経営するの任に当たらなければならぬ。願はくば諸君は天下の爲めに死せよ」（四八頁）と語って激励したという。

⑧ この漢詩の初出は、新島の欧米再遊の際の日誌「第二回外遊記（A）」一八八四年四月八日の項。同年四月二十日付新島八重宛書簡にも再出。「第二回外遊記（A）」所収の七言絶句は次の如くである（『全集』5 へ一九八四年六月、同朋社出版）三二三頁）。

在于玄海洋寄西京相国寺門前同志社校之生徒諸君

今日遂成

十年空蓄西遊志

一旦発為天外身

巴里芳花倫敦月

夢尋相国寺前人

前掲八重宛書簡では、第二句「今日遂為天外身」、第三句「巴里芳花倫敦月」となっている（『全集』3 へ一九八七年一〇月、同朋社出版）二七四頁）。なお、『全集』5の「解題」（五六〇頁）に「八重宛書簡では第四句が『夢尋相国寺前人』となっている」とあるのに前掲『全集』3所収の八重宛書簡では「夢尋相国寺前人」となっ

ているのは誤植か。

⑨『三国志』中の著名な挿話に基づき、新島を諸葛孔明に重ねる。劉備玄德の「三顧の礼」に応じ、「臥竜」孔明は南陽の草庵を出て蜀の軍師として立つ。孔明は「天下三分の計」をはじめとする幾多の知略で名を馳せたが、「五丈原の戦」の後病没する。

⑩前掲『全集』5（五〇〇頁）では「故郷に飾る錦は匣の中身に纏ふべき時にあらねば」となっており、その「解題」（五六六頁）によれば、出典は前掲『新島先生片鱗』で、「原典未詳」としている。一方、この歌は『同志社文学雑誌』第五〇号附録（一八九二年一月二三日、新島没後二周年記念）の一四頁にも新島の遺作として紹介されているが、一部字句が異なる（「古里にかざる錦ハ匣の中身尔まとふべき時にあらねば」）。柏井の〈引用〉は『新島先生片鱗』に拠っている全集版に近い。

⑪マルコ伝一五章三一節。十字架にかけられたキリストを嘲る祭司長および律法学者らの言葉。『新約全書』（一八八七年、米国聖書会社）では「人を救て自己を救ひ能はず」となっている。

⑫新島が臨終に際し地図を開いて伝道について指示したことについては、デヴィス（Jerome Dean Davis）の『島裏先生之伝』（*A sketch of the life of Rev. Joseph Hardy Neesima, LL. d.* 村田勤・松浦政泰訳、一八九一年一月、警醒社）に次の記述がある。

先生従容死に至るまで精気乱れず、数時間まで舌頭よどまず、其尚談話の自由なりしとき、知友に対し、学校に対し、伝道会社に対し懇々遺言を述べて又余蘊なし、其遺言の伝道に及ぶや、兼て三種の絵具を以て彩画し置きたる地図を其前に開かしめ、第一に伝道すべきハ此処、次ハ此処と、伝道着手の緩急に就き明示せ

らるゝ所ありたり、此際先生大に激昂せらるゝ所あるが如く、知友傍より之を静めし程なり、この伝記が刊行された一八九一年一月は新島没後一周年に当たっており、柏井はこの二ヶ月後に同志社を卒業している。

なお『同志社文学会雑誌』第三九号（一八九一年一月三一日）の「批評」欄に右の『新島襄先生之伝』の紹介が掲載されているが、その筆者「S. K.」は柏井である可能性が高い。柏井は『同志社文学会雑誌』第一三号（一八八八年五月三〇日）掲載の「入会報告」に入会が報じられており、同誌第十七号（一八八八年二月一日）には「ks生」の署名による「活人新論ヲ読ム」と題した「寄書」の寄稿がみられる。「SK」（しばしば「KS」）は、一八九三年秋の上京後、『日本評論』や『福音新報』への寄稿の際も筆名として柏井がしばしば用いているものである。これは柏井が土佐時代以来「えん」ではなく「その」と名のっていたことに由来するイニシアルとみられる。室町教会牧師を務めた二男忠夫は同志社時代の柏井の日記に「えん」と名乗ることとしたとの記述があると語っていたという（令孫柏井創氏のご教示による。日記は未見）。実際に『土佐人名事典』（一九七一年、高知市民図書館）では「かしわいその」となっている。

⑬この漢詩は「有感」と題されているもので、初出は一八八九年十一月二三日付横田安止宛書簡（『全集』4（一八九九年八月、同朋社出版）二四五―二四六頁）。「漫遊記事」一八八九年二月一九・二〇日の項にも再出（異同なし）。それは次の如くである。

徒仮、公事逞私慾 忼慨誰先天下憂

廟議未定国歩退 英雄不起奈神州

柏井の引用では傍点部がそれぞれ「假」「慷」となっている以外は同じである。

なお、前掲『同志社文学雑誌』第五〇号附録一三頁には、柏井の引用と同じテキストが掲載されている（ただし返り点付）。前掲『新島襄先生片鱗』（五一頁）所収の書き下しを引用しておく。

徒らに公事を假って私欲を逞うす

慷慨誰か天下に先って憂へん

廟議未だ定まらず国歩退く

英雄起らずんば神州を奈せん

## 二 解 題

### 1 同志社生柏井

新島が大磯の宿泊先で没したのは一八九〇年一月二三日であった。当時柏井は同志社普通学校三年に在学中で、葬儀が執り行われた二七日には新島を悼む長い葬列の中の一人として若王子山に登っている。次の柏井の回想は当時の同志社の〈空気〉をよく伝えている。

余輩が京都の相国寺門前の同志社の学窓に入った時分の事を追憶すると、同志社の春はやゝ老ひかけた頃であったに拘らず、猶ほ頗る爛漫たるものがあつた。新島総長は既に病床の人であつたなれども、金森〔通倫〕、浮田〔和民〕、森田〔久萬人〕の諸氏はその羽翼となり、清教徒的精神を以て九百の学生を鼓舞啓発せられた。東京の小崎〔弘道〕、徳富〔猪一郎〕、横井〔時雄〕の諸氏等が時々來つて演壇に立たれた時は、我等は光榮の冠を

戴いた將軍に接する如き敬意を以て彼等を迎へた。明治二十二年京都に開かれた第一夏期学校も、又新島氏を若王子山頭に葬った明治二十三年一月二十三日の光景さへも、余輩には猶ほ春の画中のものたるを感じらるゝ。

〔過去の春と将来の春〕、『福音新報』一九〇九年九月三〇日、『柏井全集』続編第四卷一六七頁

この追悼文を書き上げた当時、柏井は前年春に同志社を卒業して郷里高知にあつた。この追悼文は、同志社で行われる新島の没後二周年記念会に高知から出向いた柏井が、夜に行われた生徒による「記念夜会」に近々の卒業生として出席し、朗読したものとみられる（注釈②）。

## 2 新島遺品庫に収められた経緯

追悼文は、一九五九年に柏井の長男光蔵（当時洗足教会牧師）から当時同志社大学神学部長であつた山崎亨を通して同大学に寄贈されたものである。追悼文を収めた袋には「寄贈 同志社大学 柏井光蔵」と書かれた紙が同封されており、同大学には「柏井園氏自筆」の追悼文一綴の寄贈を受けたことに対する光蔵宛の礼状（一九五九年六月一日付総長文書、当時総長は大塚節治）の写しも残されているという（同志社社史資料センターの布施智子氏のご教示による）。柏井はこれを若き日の記念として保管していたのであろう。それが光蔵の手に引継がれ、戦後同志社に寄贈されたのである。

### 3 追悼文の内容

#### 新島との出会い

柏井は追悼文を新島との初対面の記憶から語り起こしている。柏井が初めて新島の訶咳に接したのは一八八七年一月二〇日に同志社の礼拝堂で行われた〈ハーディ追悼説教〉においてであった（注釈③）。柏井は涙にむせぶ往時の新島を偲びつつ、その説教の一節を「猶記憶ス」として引用しているが、その正確さには、初対面の総長新島の説教を一語も聞き漏らすまいと筆記する同志社新入生柏井の熱心をうかがうことができる（注釈④）。

#### 至誠の人

柏井は新島を何よりも「至徳」＝「至誠」の人と捉える。しかしそれは道徳家のような冷然たるものではなく、「容ハ温然トメ親ムヘシト雖モ其中ニ凜然トメ嚴霜烈日ノ如キモノアリ 其音ハ惇々トメ愛ニ充テリト雖モ中ニ炎々タルノ光焰ヲ含」むものであった。その「氣ニ動キ体ニ満チ容ニ溢レ自ラ動キ又人ヲ動」かす新島の「一種の徳」が、幾多の青年たちを鼓舞し発奮させたのである。——このような〈良心の全身に充滿せる「至誠の人」〉という柏井の新島像は、熊本バンドの人びとをはじめ新島に接した多くの弟子たちの〈証言〉と軌を一にしている。

#### 新島の「志」

柏井が追悼文で強調するのは、右の「至誠」の徳の淵源としての新島の「志」である。

日本ノ青年ヲ薰陶シテ至誠ナル青年トナシ日本ノ社會ヲ開拓シテ正義ノ社會トナシ精神的ノ教育ト基督教ノ真理トニヨリ日本國ヲ根底ヨリ改造スル コレ先生ノ志ナリ

「日本國ヲ根底ヨリ改造スル」こと、それは、日本の青年に「精神的ノ教育」をほどこし「基督教ノ真理」を宣布

することによって日本の社会を「正義ノ社会」へと変革することに他ならない。この「志」は「炎々タル烈火ノ如ク燃ヘテ已マス 発メ米國碧山州ノ集會ニ濺ク涙トナリ至誠熱血ノ祈祷トナリ同志社ノ設立トナリ数年間ノ東奔西走トナリ」、新島は「遂ニ此志ヲ抱テ大磯ノ客舎ニ歿」したのである、と柏井は訴えている。

#### 献身の生涯

新島の「志」を確認するにあたって柏井が殊に強調するのは、新島が貫いた〈献身〉の姿勢である。柏井は新島を『三國志』の諸葛孔明に重ねる。最後に五丈原に死することになる孔明は劉備玄德の求めに応じて草庵を出て軍師として立った時、既に一身をささげ己に死んでいた。同様に、新島も米國からの帰国に際し「功名富貴」を求める己を殺したからこそ「僅ニ四五人ノ書生ヲ集メテ獨リ相國寺前ニ学ヲ講」じ得たのである、と。「人畢生ノ大目的ヲ抱キ之ニ向テ進ムヤ生モ惜ムニ足ラス死モ哀ムニ足ラス丈夫之ニ至ラハ亦壮ナリト云フ可シ」。己の利欲を殺した新島と同じ「有為の志」を立て一身を献げないなら、一体「何ヲ以テ先生ヲ紀念スト云ハンヤ」——この「同志」への強い呼びかけをもって追悼文は結ばれている。

#### 4 資料の意義

##### 新島の人物と志を伝える名文

新島研究の資料としては、熊本バンドの人びとをはじめとする新島の弟子たちが残した資料が大きな意味をもつことはいままでもない。その中で、彼らの後輩として同志社に学び、かつ在学中新島の聲咳にも接した一同志社生によって没後二年の時期に記されたこの追悼文は、新島の説教、演説の様子やその文言の細部を生き生きと伝える資料と

して、一定の価値を有するであろう。また歴史的・伝記的資料としてのみならず、新島の人物と志を、格調高く謳いあげた韻律に富む名文としても記憶されるべきであろう。

〈史伝家〉 柏井の片鱗

柏井は後に『基督教史』（一九一四年、日本基督教興文協会）の著者として知られるようになるが、けだしその文筆の本領は史伝において最もよく發揮された。この追悼文は、その〈史伝家〉としての柏井の片鱗を示しているといふことができる。その際、当時刊行されていた新島伝（注釈⑫）を繙いているのは当然のこととして、特に目を引くのが新島の遺した漢詩や和歌の引用である（注釈⑧⑩⑬）。これらの漢詩・和歌は新島の日誌や書簡に見いだされるもので、柏井が追悼文を書いた没後二年の当時は、それらの一次資料は未整理の状態であったと思われる。柏井はなぜこれらの新島の詩歌を自在にしかも正確に〈引用〉することができたのであろうか。この背景には、柏井が在学中「同志社文学会」の会員として同会の機関誌『同志社文学会雑誌』の編集・執筆に携わっていたことが関連していると思われる（注釈⑫）。同志の新島没後一周年（一八九一年一月）・二周年（一八九二年一月）の記念号には新島関連資料が紹介されているが、新島の漢詩や和歌もそこで一部紹介されている。おそらく同志の編集部では、新島の書簡や日誌などの一次資料に比較的接しやすかったのではないか。柏井は在学中からその〈環境〉を利用して新島の一次資料を閲覧し、書き留めていたものと推定される。

柏井における新島の影響

柏井が感銘を込めて描いている新島の「志」とそれに殉じる「献身」の生涯は、その後の柏井の〈道標〉の一つともなったと考えられる。後に柏井が中心となって創刊された『文明評論』の第一巻第一号（一九一四年五月四日）の

巻頭言「我等の志を述ぶ」（署名は「文明評論社同人」だが、これは柏井とみてよい）には「絶東の我が愛する郷國に清美純潔なる基督教文明を建設する」という「夢」＝「志」が表明されている。けだしここには教育により「日本國ヲ根底ヨリ改造」し「正義の社会」となすという新島の「志」との共鳴を聞き取ることができよう。実際、後に植村正久のもとで学んだ柏井は日本基督教会の「神学教師」として身を献げ（一九〇二年明治学院神学部教授、一九〇五年東京神学社教授ならびに教頭）、一九〇六―七年にかけては基督教青年会幹事として『開拓者』『明治の女子』等の機関紙を編集、自らも寄稿し、各種修養会の講師を務めるなど青年キリスト者の「精神的ノ教育」にあたり、前掲『文明評論』を通してはキリスト教の立場から「文芸、政治、哲学、道德の各方面に觀察の光を投」じ、「清美純潔なる基督教文明」を建設すべく、日本社会に働きかけつづけた。かくして宣教・教育・研究・文筆・牧会の多岐にわたる活動に挺身するさなか、柏井もまた五十歳を前に病に倒れ、その〈献身の生涯〉を閉じたのである。「人畢生ノ大目的ヲ抱キ之ニ向テ進ムヤ生モ惜ムニ足ラス死モ哀ムニ足ラス丈夫之ニ至ラハ亦壮ナリト云フ可シ」との新島追悼の言葉は、柏井の生涯にも当てはまるといってよい。柏井は最後まで日本基督教会の教師として歩んだが、この追悼文は、柏井が新島の遺志を継ぐ同志社生の一人でもあることを、はっきりと証している。

## おわりに

追悼文を書いた後の柏井について一言して本稿を閉じることとしたい。追悼文を同志社で朗読した記念会からおよそ半年後の一八九二年七月、柏井は「大挙伝道」のために高知を訪れた植村正久から「君は文章が書けるか」と問われ、一文を草した。これがすなわち植村をして柏井を明治学院に呼び寄せしめた文章と伝えられる「歴山王該撒及耶

穌基督」(アレクサンダー、シーザー及びイエスキリスト)、『柏井全集』第二卷〈警醒社書店、一九二三年〉、二二三—二五〇頁)である。

一八九三年秋、高知から上京した柏井は、明治学院神学部の講師として英語と歴史を教えつつ勉学に励むこととなる。けだし植村との接触によって生じたこの人生の転機において柏井が下した決断には、追悼文の中で言及されていた、草庵から出て軍師として立つ諸葛孔明のように、また帰国後「僅ニ四五人ノ書生ヲ集メテ獨リ相国寺前ニ学ヲ講」じた新島のように、道のために一身を擲つ覚悟を要したであろう。「此時先生ノ身ハコレ先生ノ身ニアラスメ日本國ノ為ニ献シタルナリ 上帝ノ為ニ献シタルナリ」。新島の追悼文にこう書いた柏井は、期せずして自身もまた「日本國ノ為ニ」「上帝ノ為ニ」に身を献げる〈準備〉をなさしめられつつあったということができよう。

〔付記〕 本稿を作成するにあたり、同志社社史資料センター布施智子氏、昭和女子大学図書館、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫、および柏井創氏から、資料閲覧の便宜やご教示・ご支援を賜りましたことを記して感謝申し上げます。